

令和7年度 西与賀小学校研究主題

1 研究主題

自律的・協働的に学び、自分の考えを表現する子供の育成（1年次）

2 主題設定の理由

(1) 前研究と児童の実態から

令和4年度より「学ぶ楽しさを味わい、自分の思いを表現する西与賀っ子の育成」を全体研究主題に掲げ、「興味・関心をもち、学ぶ楽しさに触れる(1年次)」、「知識・技能の獲得、学ぶ楽しさを感じる(2年次)」「『なぜ』『知りたい』から生まれる対話的学びを通して(3年次)」を副題として授業実践を積み重ねてきた。研究の成果として、国語科、算数科において「子供の知的好奇心を高める単元びらきや本時の導入の工夫」「考えを広げたり、深めたりするための対話的学びを組み込む」「教科固有の見方・考え方を明確にした単元構想」などの手立てで、学ぶことを楽しんだり、自分と友達の考えを比べながら聞いたりする態度が育っている。

一方で課題として、教師から指示されたことには取り組むが学びに受け身になってしまう面があり、令和6年度末の学習に関するやる気のアンケートにおいて「やる気がある」と答えた子供が全体の32%だった。全国学力・学習状況調査、CRT標準学力検査では、思考力・判断力・表現力等の結果が全国比に達しておらず、自分の考えを伝えることに苦手意識をもつ子供が少なくない。

(2) 学校教育目標から

本校の学校教育目標は、「元気いっぱい、自分から学び、共に高め合う西与賀っ子の育成」である。こちらを目指す子供像として掲げ、教育課程を実践している。校内研究では、この学校教育目標を具現化できるように、全ての職員が連携し、子供たちが自ら学びに向かい、他者と高め合う授業づくりや、学ぶ集団をつくる学級経営の在り方に迫っていきたい。

(3) これからの社会から

グローバル化や情報化が進展する現代社会の中では、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝搬し、先のことを見通すことが困難な時代となっている。子供たちが将来就くことになる職業においても、技術革新等の影響によって大きく変化すると予測されている。また、2045年には人工知能が人類を越える「シンギュラリティ」に到達するという指摘もある。そんな予測のできない未来に対応するためには、膨大な情報に対して受け身になることなく主体的に何が重要なのか判断し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められる。

3 研究主題について

① 「自律的に学ぶ」とは

自律は、自分で決めたルールや価値観に従って行動することを意味する。その意味合いから本研究では、自律的に学ぶ姿を、単元の学習課題や本時の学習問題・めあてに対する自分の目標を設定し、その目標に向けた学習内容や方法を決定して学び続けることと捉える。

②「協働的に学ぶ」とは

文部科学省は令和3年答申教育課程部会において、「協働的な学び」を「探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士であるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する『協働的な学び』を充実することも重要である」と述べている。本研究では「協働的な学び」をペア・グループ・学級全体等の学習形態で多様な他者と関わりながら子供たちがよりよい考えを創り出す姿と捉える。

③目指す子供像「自分の考えを表現する」とは

「学習課題に対して、知識・技能を基に、思考・判断したことを、相手に伝えるために言語化すること」と捉える。話したり、書いたりすることで自分の考えを表出する姿である。

4 研究の構想

(1) 研究の仮説

学習課題を基にした単元学習を行い、効果的な振り返りを単元に取り入れれば、子供が自律的・協働的に学び、自分の考えを表現できるであろう。

(2) 研究の手立てについて

①学習課題を基にした単元学習

学習課題は、佐賀市教育委員会が勧めている「単元を通したみんなの課題（丁寧なめあて）」のことである。学習課題は3フレーズで構成される。以下はその3フレーズについてまとめたものである。

A フレーズ・・・身に付けさせたい資質・能力（指導事項）
B フレーズ・・・具体的な考え方（思考操作）
C フレーズ・・・学びがいのある学習活動（言語活動・算数的活動）

子供が学習活動への興味・関心をもち、自律的に学習に取り組むために単元を通した学習課題を設定する。単元を構想する際は、子供に身に付けさせたい資質・能力（指導事項）を明確にし、その指導事項を指導する上で有効な学習活動を位置付ける。学習活動は身に付けさせたい資質・能力を習得するための手段である。学習活動を通して、思考・判断・表現しながら子供は指導事項を身に付けていく。単元の導入では、学習課題を提示し、どのような資質・能力を身に付けるのか、そのためにどのような学習活動に取り組むのかを示し、子供が見通しをもって学習を進められるようにする。

学習課題を提示することのみならず、子供が興味・関心をもつような単元びらきや学習活動の工夫、各教科の「見方・考え方」を働かせる言語活動・算数的活動の設定、活動モデル、学習計画表の作成、子供の学びを支える教師の在り方などについても研究し、実践していく。

一人一台端末についても、学習課題、単元の流れ、活動モデル等を教師と子供が共有し、自律的に学べるように利用したり、他者との協働作業や役割分担をしながら課題解決に向け、協働的に学びを深められるように活用したりする。

② 自分の学びを自覚させる振り返り

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編に「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」と記されている。本研究においても研究主題で掲げている自律的・協働的な学びを進めるにあたり、児童が何を、どのように学び、何ができるようになったのか等、自分の学びを自覚できる振り返りを大切にしたい。子供たちと振り返りの価値を共有すること、振り返りの内容の焦点化、振り返りを単元に意図的に位置付けること（本時の振り返り、単元びらきの振り返り、単元の間で行う振り返り、単元末の振り返り）など、ただ書かせるだけでなく教師が明確な意図をもった振り返りを行う。そうすることで、子供たちが自分の学びの状況を把握し、教師自身も授業づくりに子供の考えを反映させることができる。

（3）その他の研究の手立て

① 教育データの有効な活用

学力向上に向けた校内研究を進めていくために、教育データを活用して児童の実態を捉えることから始め、研究の成果と課題について検証できるようにする。これまでのCRTの結果から、学力についての課題を見出し、各学級のWEBQUによる学級集団分析を基盤に、学習面と生徒指導面の両面についてそれぞれの学年や学校全体の課題を共有し、組織的に取り組んでいく。

② にっしー検定

昨年度に引き続き、確実な知識・技能の定着を図るために、にっしー検定に取り組む。にっしー検定は、算数科において基礎・基本の問題を10問出題し、満点で合格とするものである。今年度からは、自分の考えを表現するための力を育成するために、語彙力や文章力を高める国語の問題も実施する。

③ 実践交流会

実践報告（資料や板書やワークシートやノートなど）を毎月ごとに担当者が行い、それを基に授業実践について理解を深めたり、新たな実践のヒントとしたりする。

6 校内研究の組織・運営について

《組織① FT（ファシリテートチーム）・CS（コアシステム）》

校内研究の組織体制に関して、原則として全教職員が参加する「全体研究会・全体研修会」を「コア・システム（CS）として位置づけ、研究主任、研究副主任の4名をファシリテートチーム（FT）とする（図1）。FTのメンバーは、授業研究チームのリーダーを担い、それぞれの実践や研究の取組状況などの情報を共有できるようにし、研究の進め方について見通しを立てたり、CSにフィードバックしたりする（図2）。

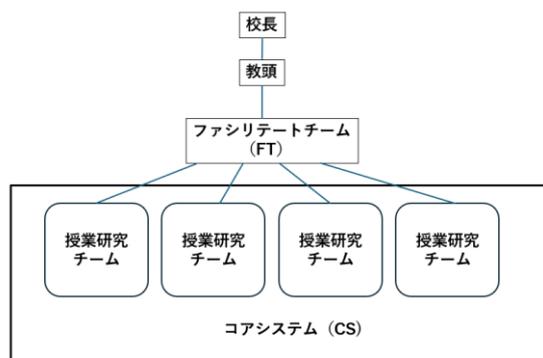


図1 校内研究組織図

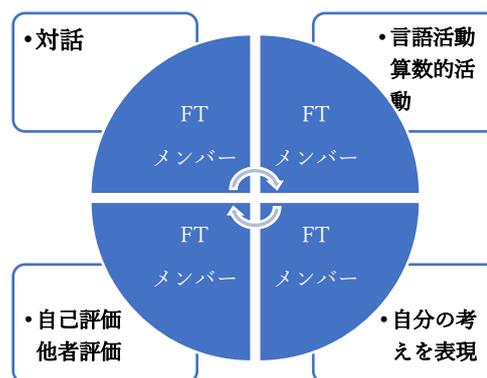


図2 授業研究チーム

《組織② 授業研究チーム》

前年度の校内研究全体会より出し合った教員の「やってみたいこと」を集約し、精選した4つのカテゴリー（仮）「①対話、②言語活動・算数的活動、③自己評価・他者評価、④自分の考えを表現するための支援」で授業研究チームを編成する。毎月一回30分程度実施し、その内容は、チームによって形態を選ぶことができるようにする。例えば、次の授業の単元づくりや授業づくり、実践交流会、模擬授業、テーマに関する学習会などである。

《組織③ 研究推進委員会》

- 今年度の研究について全体に提案する前に、研究の方向性や詳細について協議する。

《組織④ 学び部》

- 学習環境づくり、学習規律等の全校で共有する学習の整備を行う。
- にっしー検定の取組。
- 児童アンケートを実施、集計、分析。

《運営① マネジメントサイクル》

運営は、R-PDCA サイクルを実施する。まず、教育データ（CRT・WEBQU）を活用し、子どもの実態を確認することからスタートさせる。「Reserch:子どもの実態（学級集団の状態、学習意欲、学力など）の認識、-Plan:それに関する子どもと教員の課題設定（教員側の教育活動の修正、改善に関する構想）-Do:実践-Check:子どもの実態確認（教育データ）-Action:次の課題（対策・改善）」以上のように、研究の大きなサイクルをもとに進めていくこととする。

《運営② 個人研究テーマ》

個人研究テーマを決めることについては、4月から段階的に行う。4月から5月までは、主体的・対話的で深い学びの基盤となる学級集団づくりの実践をしたり、学習課題や振り返りについて実践を進めたりする。6月上旬のWEBQU アンケート実施後に、データを参照し、学級の実態や子ども一人ひとりの状態を考慮した上で、個人研究テーマを考える。個人研究テーマを設定することで、学級経営と授業づく

りについての教師ひとりひとりが研究の指針をもって取り組むことができるようにする。

《運営③ 研究授業・全校公開授業研究会》

研究授業については、年間に最低1回はすべての教員が授業を公開し、授業研究協議会を開催する。しかし、全員が授業を参観したり、授業研究協議会に参加したりすることは難しいので、短時間（10分程度）は参観することを原則とする。授業を参観して、気づいたことや学んだことについては、ICTを使い、その場で共有できるツールを活用する。同僚全員からのリフレクションを受け取ることにより、授業者の深い省察につながり、授業改善につなげる。全校公開研究授業については、各授業研究チーム代表1名が実施する。全校研を行わない教員は、授業研究チームで授業研究協議会を行う。

《運営④ 授業研究協議会》

授業研究協議会の内容を「学びのデザインとリフレクション」とし、それぞれの教師の個性と教室の多様性に即して、授業者自身による「学びのデザイン」が尊重され、教室で生じた一人ひとりの学びの事実の省察（リフレクション）を中心に協議する。どこで、学びが成立し、どこで学びがつまづいたのか、そして、どこに学びの可能性が存在していたのか、それはなぜなのかを、教室の事実即して、研究していく。授業の協議会においては、自律的（一人ひとりの学び）な学びや協働的な学びを焦点として観察したことから「学んだことの交流」をする。

《運営⑤ 校内研究サイクル》

教員が、「学び合い・支え合い・高め合う」ために、毎週短時間でも学級づくりや授業づくりに関する対話の場を設けることで、研究のサイクルを策定する（表1）。「1週目：自主研修会（単元づくり、授業づくり、学級経営など）。2週目：授業研究チーム（テーマに関連した学び）。3週目：学年チーム。4週：実践交流会。」とすることで、みんなで教える・教えられる環境をつくり、共に学び合い、共に高め合う教員集団を目指す。

表1 1か月の研究サイクル

第1週目	自主研修会（全体）
第2週目	授業研究チーム
第3週目	学年・特別支援チーム
第4週目	実践交流会（全体）

7 年間計画

月日	内容	R-PDCA
4月	<ul style="list-style-type: none">■ 研究推進委員会・今年度の研究について● 校内研究全体会①・研究組織、内容、方法の説明。・校内研究の手立て・学級集団づくりについて➤ 自主研修会・実践交流会	

5月	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 全校公開授業研究会①【モデル授業】 ・第1回 研究授業・授業研究協議会 ➤ 自主研修会・学年研究チーム・実践交流会 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> ● 校内研究全体会②－WEBQU分析 ・各学年で学級と児童の実態を分析して問題を課題化する。 ・個人研究テーマの設定。 ・授業研究チームを編成する。 ➤ 自主研修会・授業研究チーム・学年研究チーム・実践交流会 	R(実態把握) P(課題設定)
7月	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 自主研修会・授業研究チーム・実践交流会 	D(実践)
8月	<ul style="list-style-type: none"> ● 校内研究全体会③ ・ワークショップ型による中間報告会 ➤ 授業研究チーム 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ■ 実習生への模範授業 ➤ 自主研修会・実践交流会 	
10月	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 全校公開授業研究会③【授業研究チーム A/B】 ・第3回 研究授業・授業研究協議会 ➤ 自主研修会・授業研究チーム・実践交流会 	
11月	<ul style="list-style-type: none"> ● 校内研究全体会④－WEBQU分析 ◆ 全校公開授業研究会④【授業研究チーム C】 ・第4回 研究授業・授業研究協議会 ➤ 授業研究チーム・実践交流会 	C(子どもの実態確認) A(対策・改善)
12月	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 全校公開授業研究会⑤【授業研究チーム D】 ・第5回 研究授業・授業研究協議会 ➤ 授業研究チーム・実践交流会 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> ● 校内研究全体会⑤ ・アンケート結果を分析し、個人研究の成果と課題についてまとめる。 ➤ 授業研究チーム・実践交流会 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ● 校内研究全体会⑥ ・教育データ(CRT・WEBQU)をもとに、学校全体での成果と課題についてまとめる 	R(実態把握)
3月	<ul style="list-style-type: none"> ■ 研究推進委員会 ・来年度の研究に向けて 	P(課題設定)